

# Newsletter

## 日本IPBAの会

お問い合わせ : 日本IPBAの会 c/o IPBA事務局 東京都港区六本木6-2-31 六本木ヒルズノースタワー7F  
 Tel. 03-5786-6796 Fax. 03-5786-6778 E-mail: ipba@tga.co.jp Website: http://ipbajp.com

### IPBA 第33回シカゴ大会および役員報告

#### 日本IPBAの会 会長挨拶

石黒 美幸

長島・大野・常松法律事務所  
 IPBA前President



#### 1. はじめに

このたび、国谷史郎先生の後を継ぎ、日本IPBAの会の会長に就きました石黒美幸です。役不足の感は否めませんが、来る者拒まず、去る者追わずのモットーに背中を押され、お役に立てるならばとお引き受けした次第です。皆様方、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

さて、日本IPBAの会は、1991年に日本人弁護士の主導により東京で創設されたInter-Pacific Bar Association (IPBA) の日本における会員からなる組織です。IPBAの主な活動として、アジア太平洋地域における年次大会がありますが、日本においても、1991年の創立大会、2001年の東京大会、2011年の京都大会、2024年の東京大会と、これまで4つの年次大会が成功裡に開催され、日本IPBAの会のメンバーが中心となって、これらの大会の準備や運営を支えてきました。

#### 2. 日本IPBAの会の主な活動

年次大会の準備や運営の他に、日本IPBAの会の主な活動としては、以下があります。

- 年次総会
- アジア各国の法制度を比較研究するアジア比較法研究会
- APECと協働し様々な活動を行うAPEC研究会
- 幼少の弁護士や発展途上国の弁護士を毎年IPBA年次総会に招待するIPBAスカラーシップ制度の支援のため結成されたJapan Fundの運営
- 各種セミナー
- 会員相互の交流活動（新年会、ゴルフ大会、若手中堅交流会、Japan Night）

#### 3. IPBA及び日本IPBAの会への参加意義

IPBAは、世界各地の優秀なビジネスロイヤーが集まっている組織ですので、年次大会でのセッションや、頻繁に開催されるリアル及びWEBの各種セミナー・シンポジウム、機関誌であるIPBA Journal等で最新の各国又はクロスボーダーの法務関係情報に接することができます。

また、IPBAは比較的小規模な団体ですので、その気があれば、各種セッションやセミナー・シンポジウムで発表者やモデレーター・パネリストとなる機会も多く、弁護士としての技を磨くことも十分に可能です。

さらに、年次大会に参加することにより、あるいは所属する委員会の活動を通じて、世界各地の優秀なビジネスロイヤーとすぐに仲良くなれます。出会う人達は人格的にも優れた人が多く、仕事で役に立つばかりでなく、人生の相談相手が見つかったり、海外での私的・公的活動に関しても有用な情報を提供してくれたり、人を紹介してくれたりと、とても有り難い存在です。

日本IPBAの会も同様です。国内にいても、他の事務所のビジネスロイヤーと仲良くなれる機会はありませんが、日本IPBAの会に来れば、そんな人は沢山います。すぐに仲良くなれます。日本IPBAの会では、会員相互の交流活動も盛ん行っていますし、IPBAの年次大会の際には、Japan Nightという主に日本の会員を対象とした懇親の場も設けていますので、是非ご参加いただき、知り合いを増やしてみてください。きっと楽しいと思います。

かく言う私自身も、IPBAに参加するようになったおかげで、素晴らしい人達と数多く出会い、刺激を受け、切磋琢磨し、新しい情報に触れ、楽しいお酒を飲み、信頼できる友人や先輩が沢山出来ました。これは他の活動では得られなかった貴重な経験です。

#### 4. 最後に

このように楽しく有意義なIPBA及び日本IPBAの会ですが、会員の皆様方のご協力やご参加がなければ立ちゆきません。今後ともどうぞ日本IPBAの会のイベントに足をお運びください。そこで皆様とお会い出来ますことを楽しみにております。



## 初のシカゴ開催のIPBA年次大会

手塚 裕之

西村あさひ法律事務所・外国法共同事業

IPBA Japan JCM

日本IPBAの会員委員長

シカゴ大会のプロモーション



とはいって、現地では、なんでシカゴが環太平洋なの？という素朴な疑問を口にする人もいた。確かに都市としてのシカゴは太平洋に面していない。川と湖で交通網がつながっている、という見方もあるが、国としては合衆国は太平洋に面しており、その主要都市で開催するから良いではないか、と自分では思っていた。日本も京都は太平洋に面していないが、2011年の京都大会でその点を問題にする人がいただろうか。

2024年のIPBA第32回東京大会は、その企画時点ではコロナ禍が収束するかどうかが読み切れない中、東京大会組織委員会一同、大いに気をもんだが、結果的に、1,400名を超えるIPBA史上最大の登録参加者を得て、大成功となった。他方で、2025年の第33回大会は、米国中部のシカゴでの開催であり、アジアからの距離が遠く、東南アジアからの直行便がなく、日本などからの格安航空便もないなど、参加者をどこまで確保できるか、シカゴ大会組織委員会は別の意味で気をもまれたことであろう。日本のIPBA会員は、東京・大阪でのシカゴ大会のプロモーションイベントへの協力など、できる限りの協力をしたし、シカゴ大会組織委員長のMichael Chuさんも世界中を駆け回って参加の呼びかけをしていたが、今にして思えば、日本からの参加者増大への大きな転機は、通常のWelcome Receptionに代えて、ちょうどその日に開催予定のリグレー・フィールドでのシカゴ・カブス対ロサンゼルス・ドジャースの試合を皆で観戦する、というMichaelの決断だったようと思われる。日本のIPBA会員にとって、大谷選手の活躍を生で観られる機会というのは、大きな誘因であり、カブスにも鈴木、今永という人気日本選手があり、遠いし、航空券も高いし、どうしようかと迷っていた日本の会員の背中を強力に押すことになったのではなかろうか。（もっとも、日本以外の野球が盛んな韓国・台湾などの国・地域や、野球よりサッカーやクリケットが盛んな国の中には、影響力は、正直分からない。）結果的には、大谷選手のホームランは出ず、鈴木・今永選手の出場もなかったが、カブスが勝利して地元の人たちが大喜びするのを見るのは良い思い出となった。

しかし、日本からの時間的・費用的距離などから、東京大会参加のためにIPBA会員となったがシカゴ大会参加はあきらめて、IPBA会員の登録更新をしなかった、という日本会員の数が結果的には非常に多く、次のデリーナー大会に向けて、日本の会員を再び増やすし、日本からの大会参加者を増やすにはどうすべきか、というのは大きな課題と言える。



## 大会セッションの充実

今回の大会では、セッションの時間を少し短くして、コーヒーブレイクなどのネットワーキングの機会を増やす、という考えがとられたことから、セッションの充実が図れるか、という懸念も一部にあったようだが、結果的には、多くのセッションが、多くのオーディエンスを最後まで引きつけ、充実したセッションとなったようで、何よりであった。私がモデレーターを務めた最終日のEnforcement of Judgmentsのセッションも、フェアウェルパーティ翌日ということもあり、オーディエンスが集まるか不安もあったが、結果的にはDispute Reso-



lution & Arbitration コミッティのco-chairsによる  
と、同コミッティ主催セッションの中で最も参加者が  
多かったとのことである。もっとも、IPBAの方針と  
して、政府関係者等を除き、登壇者はIPBA会員登録  
をした上で大会の参加登録もすることが原則であるこ  
とや、アジアからの時間的・費用的距離等の問題も  
あったためか、当初想定していたスピーカー4名のう  
ち3名が次々と直前にドロップし、別の3名のスピーカー  
を手配する、という綱渡り的対応を迫られたのは、モデレーターとしては冷や汗ものであった。

### シカゴの都市としての魅力

シカゴは冬の寒さ、特に湖からの寒風の厳しさで知  
られるが、GW前半の気候は非常に快適で、美術館や  
高層ビル群など、観光名所にも事欠かない魅力的な都  
市である。時期にもよるが、野球やフットボール、バ  
スケットなどで、全米トップクラスのチームが活躍し  
ている。食事も、名物のステーキや、シカゴピザのほか、航空網が発達しており米国各地からの新鮮な魚介類・海産物も楽しめる。ブルースもまさに本場である。しかし、私にとっては、今回のシカゴは、大谷選手を生で観る、ということと並んで期待が大きかったのは、全米トップクラスのオーケストラであるシカゴ響で、ノルウェイの若手大人気指揮者クラウス・マケラ指揮によるマーラーの大曲、交響曲第3番の公演がちょうどぴったり会議スケジュールとマッチし、日本では発売開始直後に売り切れとなり、まずチケットがとれないマケラのマーラーを聴けたこと、である。長い曲が終わった後、全くの静寂の中、余韻を味わう時間が長く続き、そして万雷の拍手が起き、私の隣の若い男性客は、その場で嗚咽して身体を震わせて泣き出しまった。日本IPBAの会のみなさんも、それぞれの興味・関心に応じてシカゴの都市としての魅力を楽しめたことと思う。

### Sweet Home Chicago

石本 茂彦

森・濱田松本法律事務所

IPBA Deputy-Committee Coordinator



“聖地”でのIPBA年次大会

メンフィス、クラークスデールと並ぶブルースミュージックの“聖地”シカゴで開かれた2025年のIPBA年次大会。米国渡航までに多少ばたつきましたが無事クリアし、念願のシカゴに行って参りました。

### IPBAとの関わり

私がIPBAに本格的に関わるようになったのは比較的遅く、2011年の京都／大阪大会からです。このときはメイン会場での中国をテーマにしたセッションのモダレーターを担当しました。また、IPBA内でのAPEC Committeeの実質的な立ち上げにも、国谷史朗先生、石黒美幸先生、林依利子先生、中山達樹先生らの先生方とともに関わり、2017年から2021年まで同委員会の委員長を務めました。

### 委員会のコーディネート

現在は、IPBAのオフィサー（Deputy Committee Coordinator）として、IPBAの各委員会の活動のサポートを担当しています。このため、シカゴ大会でも、所属しているInternational Committee のセッションに少し顔を出したほかは、ほとんどオフィサーとしての仕事に追われていました。ちなみに、Committee Coordinatorの役割は、各委員会のChairと連携し、委員会の維持運営、特にChairとVice Chairの選任、任期の管理などをサポートするというものです（各委員会のChairやVice Chairになるには、1年以上のメンバーシップの継続といった、盲点になりがちな資格条件があり、その確認や管理は意外と大変です）。



## エッジの効いたウェルカムパーティ

Michael Chu会長をはじめとするホストコミッティの皆さんの尽力により、シカゴ大会は本当に充実したものでした。特に、大谷翔平が出場するカブス・ドジャース戦観客席でのウェルカムパーティは、（大谷の打撃は不振ではありました）個人的にもやはり大いに盛り上りました。



ただ、野球に馴染みのある日本、米国、韓国、台湾、カナダなどからの参加者と、よくわからない（しかも冗長な）スポーツの会場で戸惑う欧州や東南アジアなどからの参加者との間で温度差はかなりあったかもしれません。後ろの席で、カナダの弁護士がイタリアの弁護士に、つきっきりで野球のルールと目の前で何が起こっているのかを一生懸命説明しているのを聞きながら、野球ってローカルなスポーツだよねと再認識するとともに、こういったコミュニケーションもそれはそれでいい国際交流かもと思ったりもしました。

## 楽しすぎたフェアウェルパーティ

また、フェアウェルパーティでBlues Brothers芸人が登場して安定のパフォーマンスを見てくれたのは、長年ブルースを愛聴し、学生の頃は友人とブルースバンドにまで手を出したこともあった私にとっては実にうれしい限りでした。ショーが終わった後、舞台裏で二人と出くわしたので、思わずBB愛を熱めに語ってしまったところ、ジェイク役が少し寂しげに苦笑しながら「最近は、Blues Brothersと言っても知ら

ないって客が増えて、なかなか受けないんだよね」と話してくれたのも忘れられない思い出です。



## Sweet Home Chicago

はじめてのシカゴの街も、せっかくなので堪能しました。個人的なハイライトは、やはり伝説のギタリスト、バディ・ガイが経営するライブハウスでの本場の生ブルースでしたが、そのほかにも、スーラの「グランド・ジャット島の日曜日の午後」やホッパーの「ナイトホークス」などで有名なシカゴ美術館、世界的に評価の高いシカゴ交響楽団なども大いに楽しませてもらいました。



**At Large Councilとは**  
飯島 奈江  
堂島法律事務所  
IPBA At-Large Council Osaka

2024年東京大会総会で、IPBAのAt Large Councilなるものに選任されました。At Large Council のお役目は、Jurisdiction を代表する Jurisdictional Council member (JCMs。日本代表は手塚裕之先生) をサポートです。大阪の弁護士が代々務めているようで、私は、前任の小林和弘先生の後任となりました。任期は3年です。



具体的な活動ですが、ひとまず、IPBA東京大会、シカゴ大会に合わせて開催された役員会や総会へ出席すると共に、毎年9月末頃、開催されるMid Year Regional Conference合わせて開催された役員会へ出席しました。

IPBAは壮大なネットワーキングの場ですが、役員は限定された数のメンバーが年2回、顔を合わせますので、より緊密なネットワーキングが出来ます。

Mid Year Regional Conferenceは2024年度はワルシャワ、2025年度はマドリードで開催されましたので、遅い夏休みを9月末に取り、ポーランド旅行、スペイン旅行を楽しみました。

大阪在住のAt Large Councilとしては、年次大会出席者を増やすべく、毎秋、次年度年次大会Chair of Host Committeeの来阪に合わせ、レセプションを開催しています。

2025年度は米国ロースクール6校の学校説明会チームの来阪と日程が被ることが判明したため、大弁国際委員会担当副会長等と協議し、「米国ローx IPBA」と題して、ジョイントセッションを開催しました。

米国ロー留学を視野に入れた若手弁護士、修習生、ロー一生も多数参加し、デリー大会出席には直結しないものの、IPBAを広く知ってもらう契機となりました。

日本の少子高齢化、人口減が進む中、企業の生き残りをかけた海外市場進出は進みます。より多くの関西の弁護士が渉外業務を扱い、IPBAに参加いただくよう尽力いたします。



### IPBAセッション参加の勧め

阿部 信一郎

霞ヶ関国際法律事務所

IPBA Dispute Resolution & Arbitration Committee Vice Chair



IPBAのみなさま、46期の阿部信一郎と申します。現在Dispute Resolution & Arbitrationグループのvice chairを務めております。このグループはIPBAのグループの中でも最大規模であると仄聞しております。最近の私の関心は訴訟よりも仲裁、特に国際仲裁にあります。TPP協定、米国が離脱後に再編されたCPTPP協定においても、加盟国間の紛争に仲裁が紛争解決手段として使われることが予定されています。是非とも日本の若い先生方（ベテランの先生も同様です。）にも国際仲裁に関心を持っていただきたく思っております。いまやアジアに進出している中小企業も訴訟ばかりではなく国際仲裁の洗礼を受ける時代です。そのためにアジア各国の仲裁事情を紹介をうけ、また国際仲裁における最近の議論を討論する場として、年次大会のシンポジウムの各セッションに参加いただくことが最適であると思っております。私も以前は、Insolvencyグループのchairを経験しておりますが、いまや倒産分野も仲裁と無縁ではありません。シンガポールは倒産事件の解決に仲裁をつかうためのガイドラインを既に作成しています。倒産事件と仲裁事件の融合が図られているのです。



それはさておき、皆さんにニューデリー大会で仲裁のセッションに参加されて友達となった方と、将来一緒に国際仲裁をする可能性もあるのです。ニューデリー大会においても当グループは数多くのセッションを行いますので是非ご参加して、アジアの国際仲裁や訴訟の情報を得るとともに友人も沢山つくってください。友達が海外にいることはとても楽しいことを私の経験からも請け合います。

### 美しい街、シカゴ

琴浦 謙

アンダーソン・毛利・友常法律事務所  
外国法共同事業

IPBA Cross-Border Investment Committee Vice Chair



私は、2022年にIPBAのCross-Border Investment CommitteeのVice-Chairに就任し、2023年のドバイ大会、2024年の東京大会、2025年のシカゴ大会において、いずれも同委員会のセッションのモデレーターを務めております。

シカゴを訪れたのは、米国に留学していた2009年以来であり、実に16年ぶりでした。2009年にシカゴを訪れた際の印象は、「(訪れたのが秋口であったこともあります)とにかく寒い!」、「建物が個性的な街」というものでしたが、今回、IPBAの年次総会でシカゴを訪れた際に感じたのは、とにかく美しい街である、ということでした。

街の中心部は高層ビルが多いのですが、それが街の景観と調和しており、どこを切り取っても完成された絵のような美しさでした。

初日のWelcome Receptionは、Wrigley Fieldでシカゴ・カブス対ロサンゼルス・ドジャースのメジャーリーグの試合観戦ということで、シカゴ大会への参加が決まった日から、とても楽しみにしていました。残念ながら、カブスの鈴木誠也選手は欠場でしたが、今やメジャーリーグのスーパースタとなったドジャースの大谷翔平選手の打席を近距離で見られたことは、本当に良い思い出となりました。

その日の夜は、恒例のJapan Nightに参加し、その

後は意気投合した参加者とお酒を楽しむなど、時差ボケを感じる暇もないほどにイベントを満喫しました。



翌日以降は様々なセッションに参加しました。今大会は、1セッション当たりの時間が減少した一方で、セッション全体の数が増えたということもあり、セッション参加者が例年よりも減ってしまうのではないかとの懸念がありました。実際にはどのセッションにも例年と同程度かそれ以上の方が集まっており、最新のテーマに関する参加者の関心の高さを感じました。幸い、私がモデレーターを務めたCross-Border Investment Committeeのセッションにも、多くの人にご参加いただくことができました。

私自身、自分がCross-Border Investment CommitteeのVice-Chairに就任するまでは、セッションにはそこまでの関心がなく、どちらかといえばネットワーキングの活動が中心だったのですが、自分がセッションを主宰する立場になって、他のセッションにも参加することが増

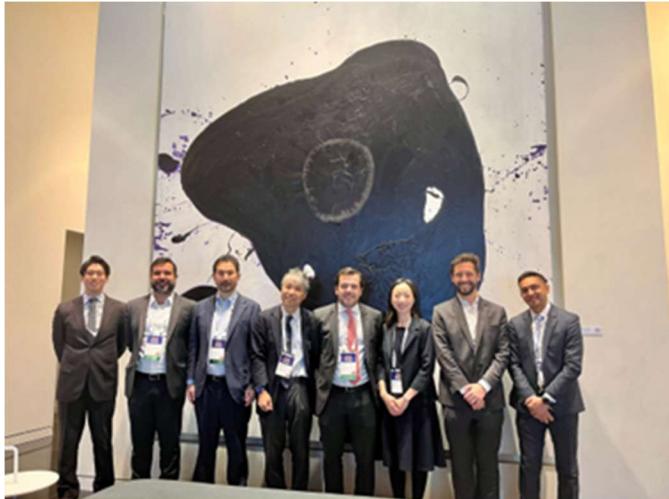


えました。IPBAのセッションには、その年の旬なテーマを扱っているものが多く、その気になってセッションを選択、参加すると、本当に勉強になります。過去の大会でも、もっとセッションに参加しておけば良かったと思っています。



次回デリー大会は、近時の経済成長が著しいインドでの開催であり、日本からの参加者も多くなるのではないかと思われます。Cross-Border Investment CommitteeのVice-Chairとして、デリー大会の成功に向けて全力を尽くしたいと思います。

いかと心配でしたが、例年通り大盛況で、常連の方を含む多くの弁護士が参加しており、色々な国の弁護士と交流することができました。Welcome receptionが大谷選手の出場する野球観戦だったり、趣向を凝らしたディナーなど、ホスピタリティ溢れる企画にも感動しました。



プログラム中、Generative AI in the Financial Sector: Use Cases, Legal Issues and Regulatory Considerationsというパネル・セッションのモダレーターを務めさせていただきました。現在誰もが注目している生成AIがテーマのためか、会場は満席でした。事前にセッションの準備を入念に行なった上に、パネリストにノースウェスタン大学のロースクールで講師もされているJustin Steffen弁護士にご参加いただき、生成AIに対する深い知識に基づいた発言を沢山していただくことができましたので、セッションのクオリティも高かったと思います。ご参加いただいた先生方、ありがとうございました。

### Committee Chairとして

**鈴木 由里**

渥美坂井法律事務所

IPBA Banking, Finance and Securities Committee

Co-Chair



#### ● 自己紹介

私は2017年のオークランド大会から金融分野のセッションに登壇するようになり、2020年からBanking, Finance and Securities Committee のVice Chair、2022年から同CommitteeのCo-Chairをさせていただいています。

#### ● 本年4月に開催されたシカゴ大会の感想

私は米国のロースクール留学後にシカゴの法律事務所に勤務したことがあったので、今年のシカゴ大会は久しぶりにシカゴを訪問することができる機会としてもとても楽しみにしていました。

米国はアジアから遠いため参加者が少ないのでな

#### ● 今後の活動や近況

2026年のデリー大会でCommittee Chairの任期が満了します。Chairをさせていただいたこともあり、各国の弁護士とともに親しくなることができましたし、世界に対する見聞を深めることもできました。IPBAはアジア太平洋を中心とした国際会議であり、その重要性はますます増しています。今後も国際会議へは参加したいと思っておりますので、引き続きよろしくお願ひいたします。





## 「第二の故郷」、再訪

唐川 力太

阿部・井窪・片山法律事務所

IPBA Insolvency Committee Vice-Chair



始めてIPBAの大会に参加したのは、2023年の東京大会でした。会場、食事、フェアウェルパーティのいずれもが大変すばらしく、ホスト国である日本の出身者であることを誇りにさえ思いました（改めて企画・運営に携われた皆さんに心より感謝と敬意を表します）。

私は2017年から2018年にかけてシカゴ大学ロースクールで留学をする機会があり、シカゴという街にはよくなれ親しんでいました。当時、「シカゴへ留学」というと「厳しい冬」「治安が悪い」などと言われたものですが、外気が寒くても問題ない屋内の施設が充実しているし、治安も他の大都市に比べてもものすごい悪いという感じはしませんでした。何より、ダウンタウンにもファミリーが多く居住しており、妻子を帶同して行った私たちにはとても過ごしやすかったです。そういうわけで、シカゴは大好きな街の一つで、大きさに言ってしまえば「第二の故郷」のようなものもあります。

留学から帰ってすぐにコロナ禍に見舞われたこともあり、帰国後シカゴを訪ねる機会がありませんでした。そのため、IPBAの大会にあわせた久しぶりのシカゴ再訪をとても楽しみにしていました。

…が、大変素晴らしい日本大会を経験し、シカゴのことを良く知っているがだけに、「確かにシカゴは素晴らしい街だが、果たして東京大会ほどのものが実現できるのだろうか…？」と勝手ながら心配に思っていました。わかりやすい「名物」のようなものもありない気もするし（まさか1週間シカゴピザを食べ

る訳にもいかないでしょう）、ホテルのホスピタリティは日本にはとてもかなわないでしょうし、大勢の参加者に参加してもらえる近隣場所はあるのだろうか（本当に素晴らしいところは沢山あるのだが…シカゴ川クルーズツアーやくらいか）…？と、大好きな街であるだけに、頼まれてもいないのに勝手に心配したりしていました。

ところが、そのような心配は完全に杞憂でした。

オープニングセレモニーはWrigley FieldでCubsゲームの観戦（ドジャースの大谷が登板するという嬉しそうなオマケつき）、会場のマヨーミックプレイスから数十台のバスで輸送するという圧巻のオペレーション。

フェアウェルについても趣のあるアートセンターでライブミュージックにあわせて、ブルースブラザースなど80年代の雰囲気とともに、各国の参加者と踊り夜を楽しみました。そういうわけで、「こういう楽しみ方もあるのか」とアメリカを、シカゴを再発見することになりました。



また、Insolvency Committee主催のセッションにパネラーとして登壇させていただく機会も得ました。モデレーターを務めてくださったアメリカの倒産弁護士Linnさんが、予定調和にならないようにあちこちに話題を振ってくださいり、パネラーとしては何が飛んでくるかわからずヒヤヒヤしましたが、結果、我ながら面白いセッションになったのではないかと思います。あと、セッ



ションの時間は短めの設定であったと思いますが、個人的には、様々なトピックに触れられ、とてもよいなと思いました（90分も集中力がもたない…）。

うーん、IPBAはやっぱりすごい。New Delhi大会もとても楽しみです。

### IPBA Next Generation Committeeの活動紹介

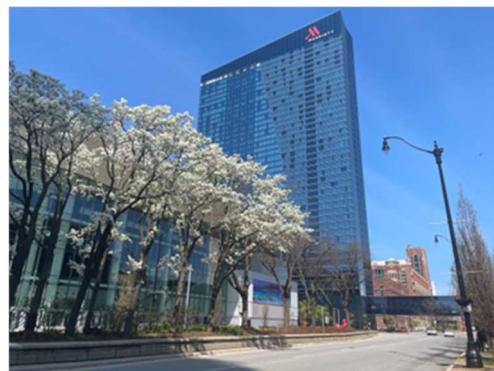
水野 雄介

法律事務所Zero

IPBA Next Generation Committee Co-Chair



皆様、はじめまして。法律事務所ZeLo 弁護士の水野と申します（第一東京弁護士会）。私は2018年に弁護士登録後まもなくIPBAにメンバーとして登録し、その後は年次総会への出席を中心に様々な活動に参加させていただいております。2024年の東京大会以降はNext Generation Committee (NGC) のCo-Chairを務めております。NGCはIPBAのいわば「若手委員会」の位置付けですが、YoungではなくNext Generationという名称のとおり、参加に当たって特段の年齢制限はなく、多様なメンバーが分野横断的に活躍していますので、ご関心のある皆様はぜひご参加を検討いただけますと幸いです（My IPBAからすぐに登録できます！）。

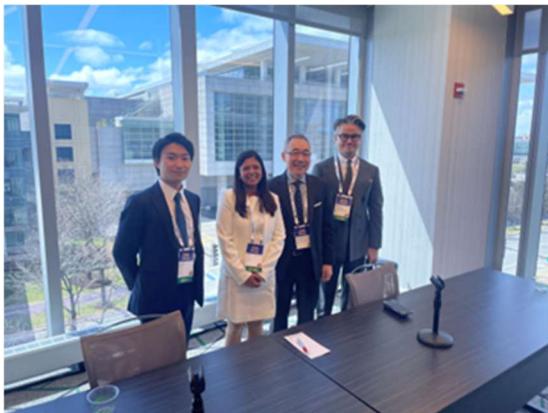


本年4月のシカゴ大会でも、NGCは以下のセッションを行いました。

- AI Meets Climate Change: Legal Challenges and Opportunities in Fighting for Sustainability with Smart Solutions (Environmental Law Committee及びTechnology, Media & Telecommunications Committeeとの共催)
- Automating Legal Processes: The New Face of Legal Practice (AIJA及びLegal Practice Committeeとの共催)
- Biotech Breakthroughs and the Law: Global Perspectives on IP, Regulatory Compliance, and Ethical Challenges in the Global Biotech Industry (Technology, Media & Telecommunications Committeeとの共催)
- ESG Series No. 4 Business and Human Rights: Global Frameworks, Practical Application and Role of Legal Advisers (ESG Committeeとの共催)

上記のとおり、AI、バイオテックといった革新的なテクノロジーやESGなどの新しい課題について、他の委員会とのコラボレーションを含めて積極的に活動し、メンバー間の交流や啓発・啓蒙を図っています。





私もシカゴの地に赴き、ESG Committeeとのセッションにてモダレーターを務めました。同セッションでは、ESGの「S」すなわち人権に焦点を当て、日本（私）に加えインド、タイ、マレーシアのバックグラウンドを持つパネリストが、人権デューデリジェンス（HRDD）の課題や弁護士の役割、リスクの把握方法や実務で用いられる枠組みについて議論しました。また、多国籍企業とスタートアップ・中小企業が直面する課題の違いと必要な支援の在り方にも触れ、人権尊重の重要性と法務アドバイザーの役割を再確認いたしました。最終日の土曜日の午前中ではありましたが、多くの方に参加いただき、オーディエンスとの質疑や意見交換も盛り上りました。

現在は、2026年2月に開催されるニューデリー大会に向けて、複数のセッションの企画が進行しています。NGCメンバーの参加によってパネリストの多様性も広がりますので、ぜひ他のセッションへのお誘いもお待ちしています。



## 第二の故郷で見たIPBAシカゴ大会

佐藤 典仁

森・濱田松本法律事務所 外国法共同事業  
IPBA Technology, Media and Telecommunications Committee Vice-Chair



### 1. 自己紹介

森・濱田松本法律事務所パートナーの佐藤典仁と申します。M&A、Technology, Media and Telecommunications (TMT)、モビリティ（自動運転・コネクテッド）、AI/IoT分野を専門にしており、TMT Committee のVice Chairも拝命しています。

### 2. シカゴ大会の感想

2025年4月のIPBA年次総会は、初のシカゴ開催でした。シカゴはアメリカ第3の都市でありながら、ダウンタウンの整然とした街並みや美しい建築、ミシガン湖の開放感、そして人の温かさが共存するとても魅力的な都市です。私にとってシカゴはLL.M.留学時代を過ごした“第二の故郷”です。10年以上ぶりの再訪となりましたが、街角の風景も昔と変わらないところもあり懐かしさを覚えつつ、シカゴピザやステーキに舌鼓を打ち、旧友とも再会でき、感動もひとしおでした。

地理的にも北米からアクセスしやすいことから例年よりも北米からの参加者が多く、米国の法律事務所からの参加者との交流も普段より多く実現しました。セッションでも米国の法律事務所からの参加者も多く、アジア太平洋と北米が実務レベルで深く繋がっていることを改めて感じることができました。

加えて、ソーシャルイベントで、大谷翔平選手の出場試合（カブス対ドジャーズ戦）をWrigley Fieldで観戦できました。アレンジいただいた皆様には感謝しかありません。シカゴは第二の故郷でありシカゴカブスを応援すべきとも思いつつ、日本人として大谷選手のTシャツを着ながらカブスの帽子を被りつつ応援していたのはよき思い出です。



シカゴ大会の成功にご尽力された皆様に心より感謝申し上げます。皆様のお蔭で、大変充実した時間を過ごすことができました。

### 3. 近況・今後の活動

日本でも生成AIや自動運転の社会実装が加速し、関連する法律相談も増えています。今年は、自動運転関係の政府の委員会等も務めさせていただき、微力ながら法制度整備に向けた議論にも参画させていただきました。アメリカや中国からは後れを取っていますが、自動運転タクシー（ロボットタクシー）の東京都心での社会実装に向けた制度整備も着実に進んできています。

2026年は、ニューデリー大会です。インドはちょうど2026年にも日本のGDPを追い抜くとのIMFの予測も出ていますが、そのような成長著しいインドでの熱い議論と皆様との交流を楽しみにしています。TMT CommitteeとInsuranceの共催で、Liability and Insurance Concerns Surrounding Autonomous Robots and Vehiclesをテーマとするセッションを実施予定です。各国の最新知見をつなぎ合わせ、日本の実務にも気づきを持ち帰ることができればと思っております。

皆さまとの再会を今から楽しみにしております。

### IPBAと私～シカゴ大会に参加して

森脇 章

アンダーソン・毛利・友常法律事務所



*"I'm a Japan-qualified attorney practicing in China."*

私は、今年、弁護士になってちょうど30年になります。そのうち、20年以上は中国に居を構えています。北京に9年、今も上海に駐在しています。途中少し間があります。2000年にはニューヨークに暮らしていました。また、北京駐在と上海駐在の間（2008-2013ころ）には、約5年の隙間がありました。その間は東京で執務をしていましたが、新たな「市場」を求めて主としてアジア諸国の法律事務所の戦略的な訪問をしていました。

「新興国」という言葉が好んで使われるようになった時代で、また日本の日本の法律事務所の海外拠点は中国を除き殆ど存在していない時代でした。ディレクトリなどで一法域につき10弱の法律事務所を選定して、戦略的に訪問する、という「飛び込み営業」のようなことをしていました。インドネシア、ベトナム、タイ、シンガポール、フィリピン、香港、韓国、マレーシア、ミャンマー、インド、トルコ、ロシア、、、。訪問後、適切な事務所が見つかれば、アソシエートに出向を打診し、その後の拠点設置につなげました。私がIPBAのAnnual Conferenceに繁く参加するようになったのは、そのような頃でした。以後、アジア、新興国での開催年はほぼすべて参加しています。それでも、なかなか足が向かなかつたのが、遠距離都市での開催、つまり、アメリカ、欧州、豪州等での開催でした。

今回は遠いな、と思いつつも、参加することにしました。前にも書いた通り、25年前にニューヨークに暮らしていたこともあったのですが、既に四半世紀経っています。しかも、シカゴは初めてです。若干緊張しました



が、会場のホテルに着くと、そこにはいつもの仲間がいました。中国（メインランド）はもちろん、香港、シンガポール、ベトナム、マレーシア、インド、チリ、ポーランド、ロシア、、、、挙げたらきりがありませんが、殆ど年に一度、IPBAのこの回でお会いする面々です。中には、普段一緒に仕事をしているけれども、face to faceでお会いする機会のない人も含まれます。また、事前に約束をしておいて、時間を決めてお会いした人もいます。勿論、新しくお会いした方もたくさんいます。

この文章を書くにあたって、初めて参加したころを思い出してみました。知り合いもなく、恥ずかしがり屋の私は日本の弁護士同志で固まりがちでしたが、多くの国の弁護士から気さくに声をかけていただき、あっという間に名刺が一箱なくなってしまいました（が、どの方がどの方が分からなくなってしまいまいました）。今は、SNSのアカウントを交換することもできるので、交換したら、ツーショット写真を撮ってすぐ送るようにしています。コミュニケーションツール

が発達する中、実際に会わなくても知り合いを作ることはいくらでもできますが、やはり同じ気概をもって集まる弁護士同志で実際に会って話すことはとても重要なと思います。今となって思うと、若いころ参加し始めて本当によかったと思います。こういう会は、じわじわとそのよさが感じられてくるものかもしれません。若い先生方も、「何のために参加するの？」と考える前に、まずは参加してみる、というのがよいと思います。



今回のシカゴ大会、最も印象に残ったのは、（もちろん各セッションのディスカッションも有意義でしたが）野球観戦に参加したことです。世界の「オータニ」を直に見ることができました。いろいろな法域の弁護士と一緒に野球を観戦し、わちゃわちゃ会話をするのもなかなかできない経験でしょう。尤も、ルールを知らない方が思いのほか多く、野球は実は普及している国が少ないということを、（頭では知っていましたが）実感したひと時でもありました。

次回はデリーですね。勿論参加します。デリーも仕事で何回も行きましたが、初めて行ったのはIPBAの大会でした。



## Energy M&A (IPBA Chicago 2026 Conference) Report

**Karl Pires**

Allen Overy Shearman Sterling LLP

IPBA Energy & Natural Resources Committee Co-Chair



IPBA 2025: Chicago featured a lively and energetic discussion on one of the conference's most topical themes: energy M&A in a world of rising demand, shifting geopolitics, and accelerating technology needs. Titled "Hot Sectors in a Heating World: Energy M&A," the session ran from 9:30 to 11:00 a.m. on Friday, April 25, and drew a relatively strong turnout given the early time slot on the morning following the gala dinner and late-night drinks for many. The exchange was brisk, practical, and global in scope, with clear views on where capital is flowing and why.

The panel was facilitated by Karl Pires, Partner at A&O Shearman in Tokyo, and brought together perspectives from North America and South Asia: Sean Muggah, Partner at Borden Ladner Gervais in Vancouver; Francisco J. Morales Barrón, Partner at Vinson & Elkins in New York; and Rabel Z. Akhund, Managing Partner at Akhund Forbes in Karachi. Together, they unpacked macro drivers across both conventional and renewable energy, covered regulatory and geopolitical inflection points, and explored how new demand centers—particularly AI and data—are reshaping deal strategies.

Setting the tone, the panel agreed that despite the volatility of recent years, energy M&A remains resilient and, in many segments, ascendant. The global deal market's revival is particularly evident in energy, where sustained demand, energy security priorities, and the growing power appetite of AI and data centers are creating tangible, near-term opportunities. Traditional hydrocarbons continue to play a critical role, even as renewables—especially solar paired with batteries—maintain strong momentum. The result is not an either-or dynamic, but an “all of the above” market in which capital is chasing reliability, speed to market, and long-term value.

Energy security ran through the session as a central theme. Geopolitical shifts have reframed energy as a national priority, and that reality is shaping cross-border dealmaking. The panel noted heightened scrutiny of foreign investment approvals and competition enforcement in multiple jurisdictions, particularly for transactions involving critical minerals, grid infrastructure, and strategic midstream assets. In Canada, Sean highlighted the country's rising prominence as a hub for critical minerals such as lithium and copper, alongside a Competition Bureau that is taking a harder look at consolidation in concentrated industries. In the United States, Francisco pointed to policy signals favoring fossil fuel development to support domestic energy independence, which could catalyze midstream and LNG-related transactions, even as renewables continue to expand under the long arc of decarbonization.

From an emerging markets perspective, Rabel emphasized how national interest, financeability, and geopolitics intersect. Belt and Road investments have reshaped power markets in countries like Pakistan, while regulatory recalibration is underway as governments grapple with legacy capacity and tariff structures. An example involving the Pakistan-based investor-owned energy utility company K-Electric was cited as a cautionary tale about the sensitivity of strategic assets and the challenges cross-border buyers can face. Domestic buyers are increasingly stepping in, green funds are catalyzing renewables, and multilaterals—including through mechanisms tied to the Loss and Damage Fund—are playing a



stronger role in crowding in capital. Hydro is gaining traction as a long-term, baseload renewable option, and transmission is squarely “in play” as aging grids require major upgrades.

On sustainability, the panel distinguished between rhetoric and deal drivers. While the pace of some renewables deals may ebb and flow with policy, sustainability has become a genuine value driver in many markets—affecting access to capital, cost of capital, and offtake certainty. In Canada, energy transition transactions continue to drive infrastructure investment. Globally, the group noted a growing trend toward carbon border measures, such as the EU’s Carbon Border Adjustment Mechanism and similar proposals elsewhere, which are influencing industrial strategies and, by extension, M&A.



Supply chain pressures remain a complicating factor. Lingering bottlenecks, component price volatility, and tariff regimes have altered the economics of solar, wind, storage, and even LNG. That reality is pushing buyers to prioritize supply chain security in diligence and deal structuring. Cross-sector partnerships—automakers investing in miners, tech companies co-investing in energy platforms, OEMs striking strategic alliances—are increasingly common. The critical minerals story is particularly dynamic: lithium, nickel, cobalt, copper, and even uranium are attracting sustained attention, with upstream assets and processing capacity competing for capital as buyers seek resilience and optionality.

Transportation and midstream infrastructure emerged as a hot category, especially in the United States. As Europe continues to diversify away from Russian gas, U.S. LNG producers and their associated infrastructure assets—pipelines, storage, and export terminals—are drawing strategic interest. The panel observed that strategic buyers are increasingly outpacing private equity in certain midstream segments, reflecting the scale, regulatory complexity, and integration synergies these assets often demand. In parallel, transmission line projects are gaining prominence in multiple regions due to grid congestion, leakage, and the need to accommodate new generation and load.



Perhaps the most animated portion of the discussion centered on AI and data centers, whose electricity needs are surging beyond earlier projections. The panel agreed this is not a marginal demand story; it is rapidly becoming a primary driver of power market growth, especially in the United States and parts of Canada. Technology companies are investing directly in renewable generation and storage, pursuing behind-the-meter solutions, and exploring firm, clean power options, including traditional nuclear and small modular reactors. These buyers are sophisticated, time-sensitive, and increasingly open to novel deal structures that secure long-term, reliable, low-carbon electricity. The knock-on effects for M&A include platform investments in renewables and storage, site control strategies near load centers, and partnerships that blend real estate, grid access, and power procurement expertise.

Interconnection delays formed another critical thread. With queues stretching for years in some markets, investors are favoring late-stage projects that have achieved interconnection milestones, shifting value toward developers and platforms with proven execution and queue positioning. This trend is accelerating consolidation among developers and tilting diligence toward grid readiness and deliverability.

Regionally, the panelists highlighted notable divergences and commonalities. In the U.S., stable demand for hydrocarbons coexists with robust growth in solar plus storage, offshore wind recalibration, and an anticipated resurgence in gas infrastructure. Texas stands out for solar and batteries, reflecting resource quality, permitting cadence, and market design. In Canada, Indigenous participation is becoming more central in project finance and development, with implications for governance, benefit-sharing, and long-term project stability. In Pakistan and similar markets, an oversupply of legacy power and emerging EV manufacturing point to a transition in progress; at the same time, the country is positioning itself as an attractive destination for international data centers given its power profile and potential for renewable buildout.

Audience questions zeroed in on regulatory approvals, CFIUS-like regimes, and the practicalities of de-risking interconnection and supply chains. There was consensus that early engagement with regulators and stakeholders, a granular understanding of local political economy, and proactive structuring around policy risk are now table stakes in cross-border energy M&A.

The session closed on a decidedly bullish note. Energy M&A today is not confined to oil and gas producers or wind and solar developers. It spans the entire ecosystem: critical mineral suppliers, component manufacturers, grid and midstream infrastructure, technology providers, and specialized service companies. Capital is abundant for credible teams with differentiated access—whether that means resource, grid, or offtake—and for strategies that deliver reliability and decarbonization together.

In short, the market may be complex, but it is rich with opportunity. Security, sustainability, and scalability are converging to reshape who buys what, where, and why. As the panel made clear, in a heating world, energy M&A is only getting hotter.



## Highlights from the IPBA Japan Foreign Lawyers' Committee

**Lars Markert / Jason Jose R. Jiao**

西村あさひ法律事務所 外国法共同事業

日本IPBAの会 外国弁護士委員会委員長/副委員長

The IPBA Japan Foreign Lawyers' Committee is a welcoming forum for members of IPBA Japan who are qualified in jurisdictions other than Japan. We aim to foster professional exchange, build lasting connections, and promote cross-border understanding within our vibrant legal community.

Last year, we were delighted to welcome members and friends to our Shinnenkai 2024 (New Year's gathering) – a wonderful opportunity to reconnect, share updates, and enjoy lively conversations over good food and drinks. (See photo below.) It was a great way to get the members interested in and motivated to join the 2024 IPBA Annual Meeting and Conference in Tokyo.

Looking ahead, we are excited to announce that our next Shinnenkai will be held in early 2026, and we warmly invite you to join us for this special occasion.

In the meantime, we encourage everyone to take part in the IPBA Tokyo gatherings, such as for the Year-End or New Year's, or when the President-Elect visits to promote the Annual Meeting and Conference – an excellent chance to meet colleagues, exchange ideas, and expand your professional network.

We look forward to seeing you at these events and to continuing to grow our vibrant and supportive community in Japan and beyond.

